

# 小学校外国語活動・外国語における「話すこと(やり取り)」の力を高める指導法 —タスクベースラーニングによる指導の工夫を通して—

奥平 穰士\*

An Instruction for promoting Interaction skill in Elementary School English  
Through the Improvement of Task based learning

George OKUDAIRA

**要旨：**本実践研究は、小学校外国語活動、外国語の指導においてタスクベースラーニングを取り入れて授業実践を行っていけば、「話すこと(やり取り)」の力が向上し、児童のコミュニケーションを図る素地・資質が高まっていくと考え、授業実践に取り組んだ研究である。本実践を通して、児童の英語に対する意欲は高まり、目的とする児童の「話すこと(やり取り)」の力、コミュニケーションの素地・資質の面でも一定の成果を確認することができた。一方、「話すこと(やり取り)」の内容や質の向上という面ではいくつかの課題は残った。今後の指導の改善につなげていきたいと考える。

**キーワード：**コミュニケーション、「話すこと(やり取り)」、タスクベースラーニング

## 1. 主題設定の理由

昨年度から、新学習指導要領における外国語活動・外国語が完全実施となった。今日に至るまで、いろいろな外国語活動、外国語(英語)の実践が行われてきた。積極的に文字指導を行ったり、ICTの活用の仕方を工夫したり、語彙力を高めたりする指導も見られている。時には、中学校の前倒しのような指導が見られる場合もあった。コミュニケーション能力を支える上で語彙力や文法力の必要性を否定するものではない。しかし、過去の英語教育を通して、語彙力や文法力があればコミュニケーション能力が身に付くということではないことは明らかになっている。私たち外国語を教室で実際に指導する立場にある者は、その経緯も踏まえ、今回の改訂が行われたことを十分考慮しなければならない。小学校外国語活動・外国語の目標は、コミュニケーションの素地・資質を育成することである。その視点からすれば、外国語やその背景にある文化を踏まえるとともに、子供が母語習得をしていくように耳で聞き、少しずつ言葉のやりとりを行っていく中で、言語が身に付いていくように進められていくべきである。

コミュニケーションの素地・資質を高めていくには、その中核となる「話すこと(やりとり)」の指導の改善を図っていかなければならないと考える。その言葉のやりとりも形式的で単なる繰り返しの練習では、パターンの習得にはなるが、コミュニケーション能力の向上にはつながらない。实际的、現実的なコミュニケーションは、知りたいことがあり、目的があり、その結果、相互理解や新たな発見がある。時には、喜びや楽しさを醸し出すこともある。そのようなコミュニケーションの素地・能力を高めていく上で有効な手立てとして、インフォメーションギャップを取り入れたタスクベースラーニングや、インタラクションのある活動があげられている。そのような手立てを取り入れ、外国語の「話すこと(やりとり)」の指導の改善を図り、コミュニケーションの素地・能力の向上を図っていかなければならないと考え、本主題を設定した。

\*川崎町立川崎第二小学校

## 2. 研究の目的

- ① 外国語活動・外国語科の指導において、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を「話すこと（やり取り）」の指導の工夫を通して向上を図る。
- ② コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の向上を図る上で、「話すこと（やり取り）」を高めるための手立ての有効性と課題を探る。

## 3. 研究の視点

外国語活動・外国語科の指導に、「話すこと（やり取り）」の力を高めるため、模擬的な活動を取り入れた Task based learning を手立ての中心にし、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の向上を図る。

## 4. 研究の手立て

研究の目的を受け、「話すこと（やり取り）」を高めるため、タスクベースラーニングを手立ての中心に位置づけ、次のような手立てを講じて実践を行う。

### （1）TBL（Task based learning）による指導の工夫（中心となる手立て）

児童が、コミュニケーションを意識して学習するためには、できるだけ、現実的、実際のコミュニケーションの場面を設定する必要がある。そのために有効な手だてとしてあげられているのは、模擬的な活動を取り入れた TBL である。

TBL の指導を学年の発達段階に合わせ、模擬的な場面を作り、児童が他の児童（または ALT、HT）の知らないことを意図的に設定し、コミュニケーションへの意欲を高めるとともにより実際のコミュニケーションが行われるようにする。

また、実際に ALT と交流し、英語で話したり、体験活動をしたりすることも、それ自体、インフォメーションギャップがある場合が多いので、交流学習をすることを通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を高めていくことにつなげていくようにする。

### （2）教材教具の活用の工夫

#### ① ICT（電子黒板、インターネット、電子教材等）・カード（絵・文字等）の活用の活用

基本的な、スキルを高める上で教科書教材の CD、ICT、カードを活用することは大変効果的である。本実践においては、教材教具の活用を通して得た英語表現や言葉の力をベースにして、TBL の活動に大いに生かすようにしていく。

### （3）実態の把握と評価の工夫

児童の学習への意欲や意識を適宜調査し、それを分析し検討することは、学習指導の改善にとって欠かすことができないことである。校内研究として、全校で 5 月と 1 月に児童の外国語、外国語活動に関する意識調査を実施し、その結果を分析し、児童の変容を探り指導法の改善に生かしていくようにする。同時に振り返りカードを作成し、毎時間のフィードバックに活用する。

## 5. 研究の方法

### （1）研究の対象

・川崎第二小学校 全児童（1 年 8 名 2 年 6 名 3・4 年 11 名 5 年 9 名 6 年 9 名 計 43 名）

### （2）研究の方法

- ① 各学年が実践授業を実施する。事前検討会や事後検討会を行い研究の視点の考察と手立ての有効性、課題を探る。
- ② 学年ごとに、児童の学習の様子や評価などを 1 年間の記録として残し学年間の傾向や児童の変容を探る。

- ③ALTや英語専科教師との国際理解教育の工夫と研究の視点、手立てとの関連を探る。
- ④児童の意識調査や普段の学習の様子を分析し、児童の変容を探り、研究の成果と問題点を探る。
- ⑤理論研究、文献研究や先進校の視察などを積極的に行い、理論と実践を通して課題の究明にあたる。
- ⑥研究の課題と成果を話し合い、研究のまとめを行う。

### (3) 研究の計画 (R2.4月～R3.3月)

- ・主題・仮説の設定・授業実践・・・・・・・・・・4月
- ・指導計画の作成・手立ての検討・・・・・・・・・・4月
- ・児童の実態調査(意識調査)・・・・・・・・・・5月
- ・授業実践(1～6学年)・・・・・・・・・・6月～12月
- ・児童の変容(意識と学習到達度)を探究・・・・・・・・1月
- ・研究のまとめ・・・・・・・・・・2月

## 6. 研究の内容

研究の計画に従い、4月に研究主題と手立てを検討し、児童の学習の到達状況を検討したり意識調査を実施したりした。児童の実態を考慮しつつ、全学年で研究主題を受けた手立てをもとに授業実践に取り組んだ。6月から12月までの間に、各学年で研究授業を実施した。同時に、児童の実態や変容を探ったり、振り返りカードで児童の思いや考えを確認したりしながら研究を進めていった。

### 6.1 児童の実態とその分析

低学年は、英語に慣れ親しみ、遊びやゲームを通して、英語の言葉を話したりすることは楽しくできていた。簡単な英語表現を用いて会話することは難しいが、ALTの簡単な質問に対して単語で答えたり、英語の指示に反応し行動したりすることは十分にできていた。

中学年においては、英語活動を楽しんでいる児童が多く、ALTや教師からの質問に対しても進んで答えたり、いろいろな学習活動にも積極的に取り組んだりしている。一方、英語での言葉のやり取りに対しては、自信を持っている児童は少ない。

高学年も中学年と同様に、英語の学習に対しては好意的に取り組んではいるものの、英語での言葉のやり取りに対して自信を持っている児童は少ない。また、英語の語彙力や音声など質的な向上を図っていきたいと考えている児童の割合が高かった。(資料3参照 各学年7月)

### 6.2 授業実践(研究授業)

#### ー单元名「野菜で作ろう」の取り組みー

##### (1) 授業の実践について

コミュニケーション能力を意識的に高める視点からインタラクション(言葉のやり取り)のある活動を取り入れ指導に当たった。実際にはコミュニケーションを促すような場面設定を用意するとともになるべく児童自身の思いで料理を注文したり、話しかけたりする活動を行わせるようにした。授業は、What would you like? や I'd like ~. の表現を練習した後、レストランの場面を設定し、店員やお客になって、身に付けた英語を活用する内容で授業を行った。(資料1 学習指導案)

－資料１－

## 第２学年 外国語活動学習指導案

日 時 令和２年９月１日（火）３校時

指導者 T１ ２学年１組 担任 奥平 穰士

T２ 英語専科 五十嵐 壮士 T３ A L T クリスティン・タン

### １ 単元名「野菜で作ろう」

### ２ 単元について

「野菜で作ろう」では、いろいろな野菜や料理の英語表現を習得させた後、これまで身に付けた、色、数、大きさなどの英語を使って、質問したり、質問に答えたりして、より主体的なコミュニケーション活動が展開していくことをねらっている。特に、英語での言葉のやり取りが活発に行われるように、買い物やレストランでの会食という模擬的な体験活動（タスクをベースとした学習）を行うようにした。

### ３ 単元のねらい

- 野菜や料理に関する英語表現の音声に慣れ親しみ、野菜に料理に関して尋ねたり答えたりする基本的な表現に慣れ親しむ。（知識・技能）
- 「野菜で作ろう」の学習を通して、自分の考えや気持ちを伝え合う力の素地を養う。（思考・判断・表現）
- フィリピンの食文化や生活習慣に関する話を聞き、日本とは異なる文化に関心をもつようにする。（学び向力・人間性）

### ４ 本時の学習活動

#### （１）ねらい

- ◎ 野菜や料理の英語に慣れ親しむと共に、英語で買い物をしたり料理をごちそうしたりする活動を通して、英語の言葉のやり取りに親しむ。
- フィリピンの料理に関心をもち、日本とフィリピンの違いや共通点に気づき、他国の文化を理解しようとする態度を育む。

#### （２）学習過程

段階	学習活動	主な働きかけと支援		留意点（＊）・評価（☆）
		T 1 (H T)	T 2 (英専)・T 3 (A L T)	
挨拶（３）	１ 本時の学習のめあてを知る。	○本時の学習のめあてを知らせる。	○本時の学習のめあてを確認する。	☆本時のめあてを知ることができたか。
	○野菜と料理の英語表現を覚え、野菜を買って料理を作る活動をする。			
	２ 挨拶をする。 ・How are you.I'm fine thank you.・一人一人挨拶をする。	○T 2・T 3の先生と挨拶をする。 ・Do you like salad?・・・	○児童と挨拶をする。 ・How are you. ・児童一人一人とあいさつを促す ・Do you like potetoes?・・・	☆全体的な挨拶の後、五十嵐先生、クリス先生と英語で挨拶することができたか。

ウォムアップ(8)	<p>3 これまでの学習の復習と Warm-up を行う</p> <p>T・What vegetable is this?</p> <p>C・It is a tomato. It is an eggplant.</p> <p>T・What kind of dishes do you like ?</p> <p>C・I like salad.</p>	<p>○今日使う表現を中心に Warm-up を行う</p> <p>・What vegetable is this?</p>	<p>○今日使う英語表現の Warm-up を HRT と一緒に行う.</p> <p>・What vegetable is this?</p> <p>・It is . .</p> <p>・What kind of dishes do you like ? I like salad. I like curry. I like potato salad. . . .</p>	<p>* カード, 模擬野菜を活用する.</p> <p>☆既習の内容を思い出し本時の学習に生かそうとしている.</p>
活動1(12)	<p>4 野菜を買いに行こう.</p> <p>・先生の説明を聞く.</p> <p>・野菜を買いに行く活動をする.</p> <p>・Hello! potato please. Here you are. 5Yen. please.</p>	<p>○野菜の買い方を説明する</p> <p>・英専, ALT と買い物の仕方を説明する.</p> <p>・活動の支援をする.</p> <p>・英語での会話の支援をする.</p>	<p>○野菜の買い方についてデモンストレーションを行う.</p> <p>E・Hello! Potato Please.</p> <p>A・Here you are.</p> <p>A・5Yen please.</p> <p>E・Thank you. . .</p> <p>○店員(八百屋さん, レジ係)として活動に参加する.</p>	<p>* カード, 模擬野菜を活用し買い物を行わせる</p> <p>☆買い物を積極的に行うことができたか.</p>
活動2(18)	<p>5 野菜料理を作ってごちそうしよう.</p> <p>①買った野菜で料理を作る Salad, potato salad, fried potato, tomato salad, curry, pizza . .</p> <p>②料理をごちそうしよう.</p> <p>・レストランに来たお客(先生)に料理をごちそうする</p> <p>C・Welcome! what (kind of dishes)do you want (like) ?</p> <p>T・Fried potato please. It is so nice and hot.</p> <p>6 フィリピンの料理の話を聞く.</p> <p>・クリス先生からフィリピンの料理のことを聞く.</p>	<p>○買った野菜で料理を作る活動を行わせる</p> <p>・はさみやのりを使い模擬的な料理を作らせる.</p> <p>○簡易レストランを作り, お店屋さんの活動を行わせる.</p> <p>・活動のやり方をデモンストレーションで示す.</p> <p>○フィリピンの野菜, 料理の話を聞くようにさせる.</p> <p>・質問を受け ALT に質問に答えてもらう.</p>	<p>○児童の料理作りの支援と声かけをする.</p> <p>・What are you making?</p> <p>・児童の作っているものを見て質問したり認めてあげたりする.</p> <p>○来客として, レストランに来て料理を食べる活動に参加する.</p> <p>・説明の補助を行う. 一緒にデモンストレーションを行う.</p> <p>・声かけ支援をしながら活動の支援を行う.</p> <p>○フィリピンの野菜, 料理の話をする. (ALT)</p> <p>・子供たちの質問に答える (ALT)</p> <p>・答えの補足説明を行う. (英専)</p>	<p>* 担任と英専 ALT でデモンストレーションを行い, 活動内容を説明する.</p> <p>☆買い物を通して挨拶したり, 買うための英語を進んで話したりしている.</p> <p>* 模擬物とカードを使って活動させる.</p> <p>☆レストランの店員になり, 進んで挨拶したり注文を聞いたりしていたか.</p> <p>☆フィリピンの野菜や料理に興味をもち進んで聞いたり質問したりしていたか.</p>



まとめ（４）	<p>８ 学習のまとめを行い本時を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の学習を学習プリントで振り返る。</li> <li>・児童一人一人感想を述べ、終わりの挨拶をする。</li> </ul>	<p>○本時の学習を振り返るようにさせる。</p> <p>○本時の学習の感想を述べさせ次の学習の予定を知らせる</p>	<p>○本時の学習の感想を述べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習の感想を言う。</li> <li>○お別れの挨拶をする。</li> </ul>	<p>*学習プリントを活用する。</p> <p>☆本時の感想を発表することができたか。</p>
--------	---	---	---	---



・ "What do you want?"  
"Curry and rice, please."



・ "Here you are."  
"It's yummy!"



・ 「フィリピンの料理です！」  
"Yes, we have a party"

### 6.3 「研究の手立て」の取り組みの実際

#### ① タスクベースラーニングについて

授業の始めには、インタラク션을意識して、必ず、一人一人がALTのクリス先生と簡単な挨拶をした後、1つ2つ質問に答える活動を取り入れた。始めは、答えるのに苦労する場面もあったが、回を重ねるたびにスムーズに受け答えできるようになっていった。

また、授業の展開の場面では、タスクベース活動を取り入れ、インフォメーションギャップのある場面や状況を設定して学習に取り組ませていった。その結果、自分で考えて言葉を選び、英語で会話する力が着実に育ってきた。さらに、授業後半では、英語専科の先生やALTのクリス先生に、単元学習と関連して聞きたいことや疑問点などを尋ねる機会をもつようにした。その結果、自分が聞きたいことを進んで質問する姿が多く見られるようになっていった。

#### ② 教材教具の活用について

絵カードやCD、ICT、カードを活用して、全学年が授業に取り組んだ。タスクベースラーニングにつないでいく上で、カード等でインプットした言葉の力は、基本的な英語のスキルを高めていく上で大変効果的であった。

#### ③ 実態の把握と評価の工夫

年間を通して、毎回振り返りカードを書かせ、児童の思いや考えを記入させた。同時に、担任も毎回、振り返りカードにコメントを書き、児童を励ましたり、分からないことや悩みに対応したりするようにした。

## 7. 児童の変容

### 7.1 児童の意識の変容

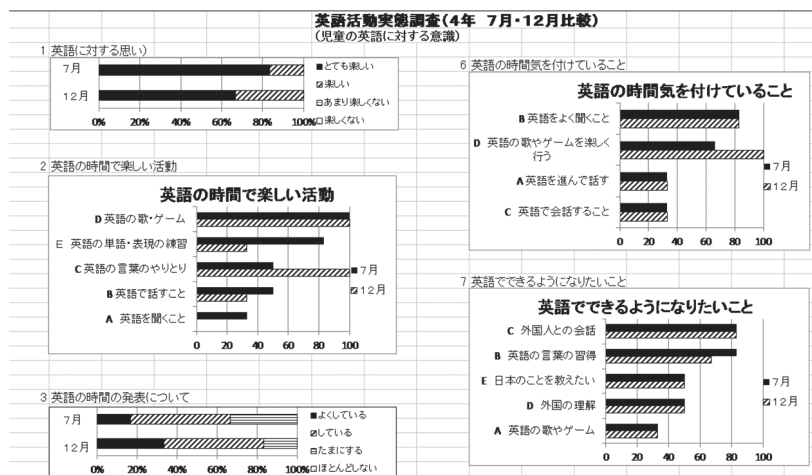
児童の外国語活動に対する意識の変容を探るため、令和2年度の7月と12月に意識調査を実施した。1～6年までの結果を分析したところ次のようなことが明らかになった。（資料3参照）

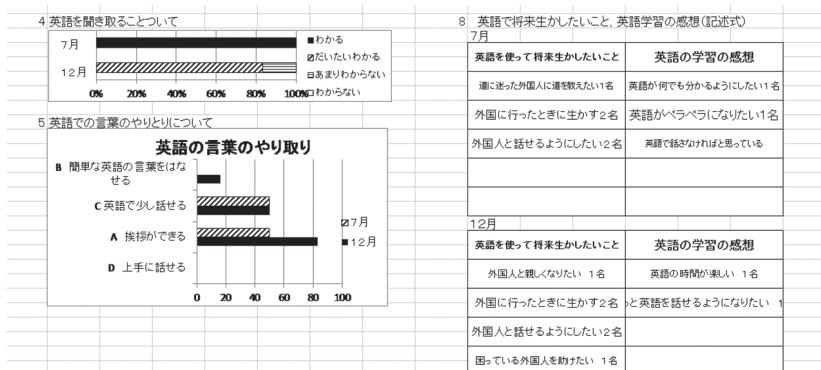
- ・年間を通して、ほとんどの児童は英語の学習を楽しんでいるととらえていた。（資料3 項目1・2）
- ・英語で話すことや、英語を聞くことが楽しいと思っている児童の割合は高いが、どの学年も、英語での言葉のや

り取りが楽しいと感じている児童の割合が高まった。(資料3 項目2・3)

- ・英語を聞き取ること、発表することに対して自信を付けている様子がうかがえた。(資料3 項目3・4)
- ・英語での言葉のやり取りについては、低学年は挨拶ができるという内容の割合が高かったが、高学年になるにつれて、簡単な英語で「話すこと(やり取り)」に対しては、自信を持ってきている様子がうかがえた。(資料3 項目5)
- ・英語の時間に気をつけ、高めたい力としては、7月と比較して、英語をしっかりと聞くことや、会話すること、語彙の習得等の割合が高まった。全般的に英語力を高めていきたいという意識が見られた。(資料3 項目6・7)

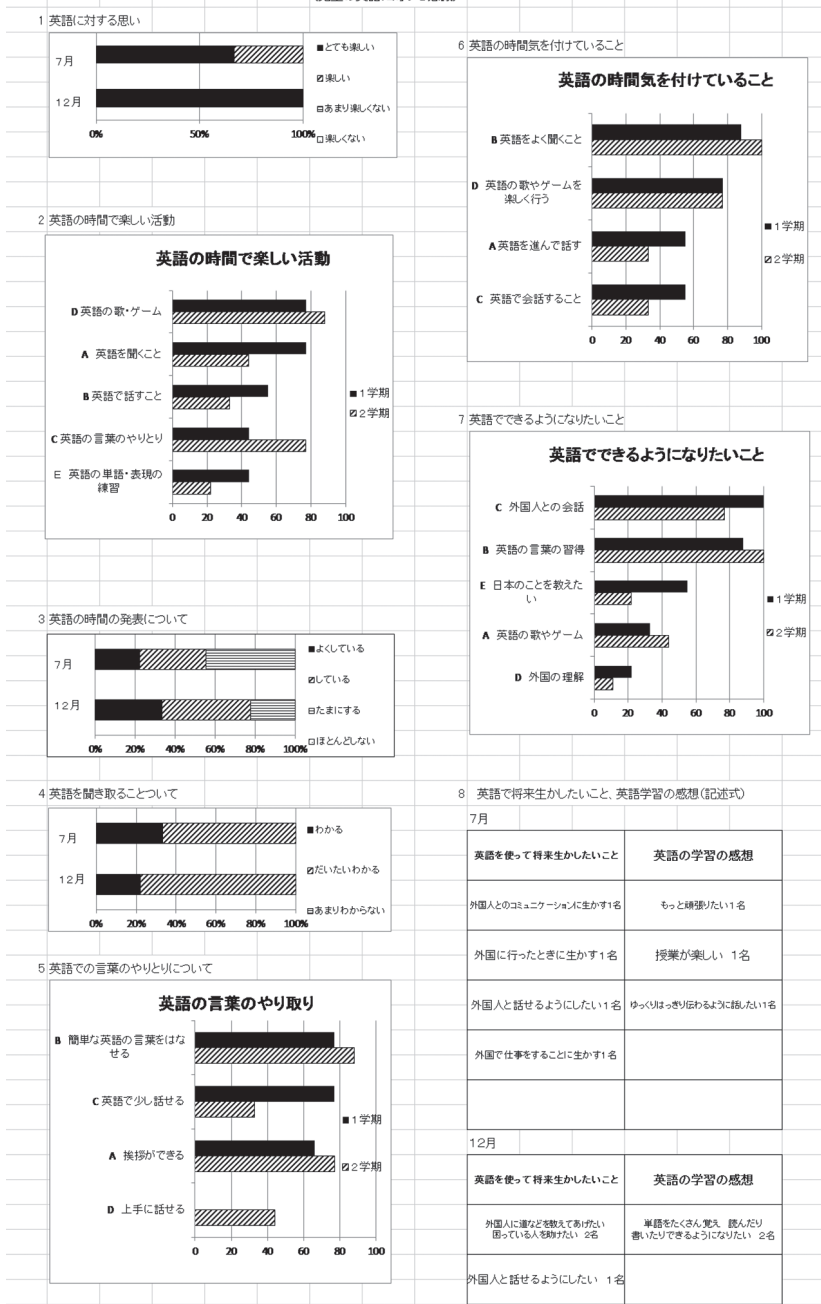
## 一資料2一





# 英語活動実態調査(5年 7月・12月比較)

(児童の英語に対する意識)





以上のことから児童の意識としては、英語の学習を楽しんでいると感じつつ、英語の能力も高まっていると意識している児童の割合高まったことがうかがえた。研究主題との関連する、英語での「話すこと（やり取り）」の面では、低学年では、英語に慣れ親しみながら、英語でのやり取りを意識しているという段階であったが、上の学年に上がるにつれて、「話すこと（やり取り）」に自信を感じつつ、意欲的に取り組んでいる様子が見られた。

## 7.2 児童の英語能力の変容

学習のまとめとして令和2年度の5、6年の英語能力の力を調査した。日本標準の英語の定期テスト平均正答率の結果は、5学年は、「知識・理解」94%、「思考・判断」93.4%、6学年は「知識・理解」96%、「思考・判断」96.6%という結果であった。5・6学年の正答率が9割を超えていた。年間を通して着実に英語の力を身に付けていったと考えることができる。

中学年においては、外国語活動としての取り組みなので、数値的な結果では示すことはできなかったが、学年のまとめから、ALTや教師からの質問に対してしっかりと答える力や自分で考えて質問する児童の割合が増えたことから、簡単な英語でやり取りする力は高まってきたものと考えられる。

低学年は、英語に慣れ親しみ、遊びやゲームを通して、英語の言葉を話したりすることは楽しくできていた。英語表現を用いてスムーズに会話することは難しかったが、ALTの簡単な質問に対して単語で答えたり、英語の指示に反応し行動したりすることは十分にできていた。

全学年を通して着実に英語の力を身につけた様子がうかがえた。本研究でねらいとする英語の「話すこと（やり取り）」の指導を通して進んでコミュニケーションを図ろうとする力を高めることは、一定の成果が見られたものと考えられる。

## 8. 研究の視点と手立ての検証

児童のコミュニケーションを図る素地・資質は高め児童の外国語（英語）を学ぶ意欲や楽しさを持続させることをめざして、タスクベースラーニングによる指導と教材教具（ICT）の活用工夫、振り返りカードによる評価の工夫（フィードバック）を手立てにして取り組んだ。その成果と課題は次の通りである。

成果としては次のようなことがあげられる。

- タスクベースラーニングの指導を考慮し、ALTとの挨拶や質疑応答、ゲーム型のクイズなどを積極的に行った。その結果、実際に行われる自然な形のコミュニケーションの素地を育むことにつながった。
- 模擬体験や疑似体験を取り入れた「タスクベースの活動」により、英語で話す必然が生まれ、その結果学習の楽しさを引き出し、コミュニケーション活動も活性化した。
- 毎時間、振り返りカードを書かせ、担任によるフィードバックを行った。その結果、児童が自分自身を振り返り、次の学習への意欲付けを図ることができた。
- ALTに児童が課題に思っていることを聞く時間では、コミュニケーション能力の向上ばかりでなく、文化の違いに気付いたり、日本と他国との違いを理解したりすることにつながった。

一方課題として次のようなことが浮き彫りになった。

- 「タスクベースラーニング」では教材教具や具体物場面設定が重要な役割を果たした。タスク活動を行うための環境を整えるためには、綿密な計画や準備が必要である。事前の準備を必要に応じてどのように準備していくかが大切になってくる。
- 振り返りカードが校内研究としてのものと英語専科の先生によるものの2種類があり、時間内に振り返りを行うことが難しいということがあった。統一した内容のもので取り組めるとよかった。
- 教材教具が、新しい指導要領の内容と合わないものがあつたので、新単元に沿った教材教具にするようにしていかなければならない。

## 9. 研究の成果と課題について

児童のコミュニケーションを図る素地・資質を育み、外国語（英語）での「話すこと（やり取り）」の力を高めるため、タスクベースラーニングによる指導を手立ての中心にして授業実践に取り組んできた。

インフォメーションギャップのある活動を取り入れ、振り返りカードによるフィードバックを行ったことで、話そうとする意欲を喚起することができたことは、大きな成果があったものとする。また、英語の能力の面でも、知識・理解、思考・判断の面やコミュニケーション能力の向上においても一定の成果が見られたことは、素直に喜ぶたい。

実際の学習の場面において、一人一人の児童の意識の面とともに英語の知識理解の面、コミュニケーション能力の面においても着実に力をつけた印象がある。インフォメーションギャップのあるTBLを通して、自分の思いや考えでコミュニケーション活動に取り組ませたことが、児童の興味関心を持続させ、英語力の向上にもつながっていったものとする。

一方、英語で自分の思いや考えを発進する力は今一步の段階である。コミュニケーション能力の素地や資質の更なる向上を図っていききたい。また、タスクベースラーニングにおいては、場面設定や教材等の準備で時間を要することがあるので、これまで積み重ねた指導法や教材教具を活用し、スムーズに学習活動が行えるよう改善を加えていくよう工夫していききたい。

コロナ禍で世界の国際交流が難しい時代になってきている。しかし、このような時代であるからこそ、国際理解を深め、コミュニケーション能力の質的な向上を図ることは、大事にしていかなければならないと考える。世界の変化や今日的な社会の要請につながる外国語活動・外国語教育に向けて、尚一層指導の改善を図っていききたいと考える。

## 参考文献

- 市瀬智紀（2013）.『グローバル人材の育成を目指す学校教育』（中等教育資料）：学事出版
- 鈴木渉（2018）.『実践例で学ぶ第二言語習得研究に基づく英語指導』：大修館書店
- 文部科学省（2017）.『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』：開隆堂
- 高島英幸（2007）.『英語のタスク活動文法指導』：大修館書店
- パッツイ・Mライトバウン／ニーナ・スパダ（2014）.『言語はどのように学ばれるか』：岩波書店
- 松村昌紀（2012）.『タスクを活用した英語授業のデザイン』：大修館書店
- 橋本満弘／石井敏（2000）.『コミュニケーション論入門』：桐原書店